

Title	<批評・紹介>Le traité économique du "souei-chou" Etienne Balazs
Author(s)	愛宕, 松男
Citation	東洋史研究 (1957), 16(2): 206-209
Issue Date	1957-09-10
URL	http://dx.doi.org/10.14989/148070
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

定する事になるから、それに對する反作用の一つとして自ら質的變化をとげ、生産過程そのものを自らの営みの下にまきこむのである。傅氏も認めているとおり、前期的商業資本は一方において封建社會を培養基として貨幣財産を集積し、他方においては封建社會の基礎體制を締めつける事によつて自由な労働力を遊離し、資本家的生産様式成立の條件をつくり出すが、しかしこの條件の上に資本家的生産様式が展開するかどうかの決定條件は、生産過程の事情——手工業生産の發展の程度（質的・量的）の如何によるのであつて、この點の分析を抜きにして單純且つスムーズな資本の質的變化を想定する事は現象の記述にとゞまつて、その本質的な意味を見失う危険があると思うが、どうであらう。

（寺田隆信）

Le traité économique du "Soueï-chou"

Etienne Balazs, Leiden, 1953

唐代社會經濟史の專家で、つとにその勞作「Beiträge zur Wirtschaftsgeschichte der 'T'ang-Zeit」を以て知られているバラシエ教授が、今また中國、中世に於けるその方面の基礎史料たる「隋書食貨志」をとりあげて、精密な譯解を「通報」(T'oung Pao vol. XLII, livr. 3-4)に連載した。こゝに紹介せんとするものは、これらの原稿が單行本の形にまとめあげられた一九五三年のライデン版である。

もつとも「隋書食貨志」のフランス譯としては、本書に先行してうでに故マスベロ博士にその未完成の遺稿があつた。しかしながらこの遺稿は、とびとびの翻譯を以て綴られると共に、テキストの半ばにも達しないという全くの草稿であつた關係上、できればこれを

補修完結して上梓したいというドゥミエヴィーユ氏 Paul Demiéville の委託にもかゝわらず、バラシエ教授は遂にこれを斷念し、結局まつたく別個な譯解を本書の體裁で完成することにした。「……從つてこの翻譯に關する責任はすべて自分にある」と氏は特にこゝとわつているのであるが、この言葉の中にこそマスベロ博士の遺稿に満足しきれなかつた著者の自信がおのずから滲みでているのである。確かにこの自信は、第三者の立場からしてもその相應しさを否みえないであらう。それというのも「隋書の經濟篇（『食貨志』）という本題に副えて、「中國中世における經濟・社會の研究」とサブタイトルがわざわざ附されているところからも判るように、本書は決して單なる史料『隋志の翻譯に終始する著作ではなかつた。從つて譯文の正確さに加えて特殊研究を以てするという充實さが、實に著者のこの自信を裏附けているからである。

本書の内容構成は、その第一篇がまず隋書の由來を説明しつゝ食貨志の史料の價值を論じ、延いて中世社會經濟史の重要問題の提起に及ぶ序論を以て充てられる。次でテキストの翻譯を以てする第二篇、さらに引續いて分量的にはそれを凌駕する二百五十の譯註からなる第三篇、そして最後に「六鎮の叛亂と北魏の分裂」より以下「北魏およびその後繼諸王朝の軍隊組織」・「北齊の田制に關する文獻」・「蘇綽の六條詔書」・「中世文藝の統計目錄（『經籍志』について」・「七世紀初頭の州縣と人口に關する記錄（『地理志』）」・「六世紀における重大事件の對照表」の七特殊研究を附録とする第四篇が配せられている。本書のもつ學問的價值の重點は、こゝに於て自らその所在を明かにするのであつて、從つて紹介者としての筆者の立場もまたこの性格に沿わねばならない。

すでに觸れたように本書の第一篇は、書誌學的もしくは史學史的觀點からする隋書の解説が序文の形で述べられている。すなわち漢書以來の正史が大體として志を缺いてきた大勢の中にあつて、隋志の意義が論ぜられる場合、當然そこに問題となるべき五代史志への考察が着實になされているのは勿論のこと、紀傳體の正史に於て志の占める重要性が、なかんずくその本質として王朝をこえた會通史的記述であるべき點が―五代史志を採つた隋志は正しくこの理想にかなつてゐるのであるが―強調される。この點テキストの翻譯に當つても、百衲本と乾隆殿版とを併用する用意を怠らない態度とも關連して、著者のもつ地味ではあるが卓越した中國史學の常識を十分に看取しうるものと言ひうるであらう。

隋書の正しい解題を終つた序論は、次で隋志がその記述の對象としてゐる時代、すなはち六朝南北朝の、より正確にいつて漢―唐をつなぐ中間期の概觀にはいる。漢末の内亂から大きな社會的特權を行使しはじめた中國貴族と、それに征服者として政治的權力を掌握したトルコ・モンゴル人首領を加えた支配層の下に、その庇護を求めて依存する庶民階級が、ヒエラルヒー社會の基盤をなしていた。越えることのできなないこの社會階級の不平等を、著者は中世封建制 *Feodalisme du Moyen Âge* と規定する。もつともこの時代規定は、中國史の時代區分を論じたデュイヴンダック L. Duvendack に従うものだというが、少くともその説がこゝに採用されている以上、それは又バラシシュ自身の見解でもあることは無論なのであつて、序論の冒頭に述べられてゐる秦隋比較論の如きは、確かにこの時代觀に密着した論理だといえるであらう。その歴史的環境の類似を論ずるこの比較論に於て、バラシシュは戰國の分權と南北朝の分

裂とを對比する。がしかしこの議論には、實は疑問を挾まざるをえないのである。戰國諸王國の獨立體制 *particularisme des principautés* による封建制と南北朝貴族 *barons* による封建制とがどのように同異するものなのか、換言すれば前者を克服して出現したはずである秦の文官制度 *lettres-fonctionnaire* が六朝貴族制にいかに対応するのかが、この間の説明が全くなされてゐないからである。この點、秦隋比較論は時代の大きな轉換に關連して或る共通性を指摘しようとするものではあるが、その意圖はもつと本質的な分析を経なければ完成されないものと評せなければならぬ。

第一篇序論で展開された中世論の史料の根據として提出されているものが他ならない第二篇テキストの翻譯である。難解な食貨志の本文を譯出して、法制・經濟上の術語から古典・故事の引用に至るまでを大過なくこなしたためには、廣くかつ深い中國史の知識と精力的な努力とが要求されるものであることは更めて斷るまでもない。しかも局部的な譯文の確かさだけでなく、全體的な理解の正しさがこの翻譯の權威を更に高めてゐるのである。この事實は先ず第一に、豊富にして詳細な譯註の――が、いずれもかゝる配慮を本にして選擇設定されてゐるところに示されるであらうし、また第二には、本文そのものに意のつくされてゐない箇所を認めるや、これを第四篇附録の問題にとりあげて解決しようとする態度に――例えば中世の間斷なき戰亂に關しては、附録Ⅰ・Ⅱが本文に代つて戰亂の原動力を尋ね兵制を論じてゐるのであるし、同じく附録Ⅲは通典所収の關東風俗傳を資料として、均田法の架空的要素を明かにしつゝ、その眞の基盤を浮き立たしめようと試みてゐるのである――餘すところなく示されるのである。しかしながらこれらにもまして特に

この評價を正當づけるものは、新たに譯文に與えられた整然たる目次づけであろう。すなわち

I 序

II 中世經濟の歴史的要項

1) 晉

2) 東魏及びその後繼者たる北齊

① 魏の分裂と高歡による新國家

② 高洋治世の濫費と國庫の姦偽

③ 五六一一年(河清三年)の田制—屯田と倉庫の制度

3) 西魏及びその後繼者たる北周

① 賦役

② 軍役

III 隋の經濟

1) 國初の經濟制度と經濟法令

2) 文帝の治世

3) 倉庫—輸送及び運河の組織

4) 公解錢

5) 煬帝の治世

IV 商税と幣制

1) 商税—通行税と市場

2) 梁代の貨幣

3) 陳代の貨幣

4) 北齊・北周及び隋の貨幣

唯々段落によつてのみ區切られる原文叙述の推移が、その内容に即してこのような四篇十二章五節に整理されるには、いふまでもなく

隋書食貨志全體に對する正確な理解が前提されていなければ叶わないことだからである。著者がこのなみ大抵でない仕事をかくまでに美事になしとげたのに對しては、全く敬意を表明せずにはおられない。

もつともこうは言つても、それは必ずしも譯文が完璧であるとするのではない。楊聯陞氏の指摘もすでにあることではあるが、それ以外にも未節の誤譯はなお二三に止らない。例えば「靈帝賣官、公卿州郡各有等差」(一)・「吏在貪殘、官無攸次、咸資鑑貨」(一)・「王及主婿外祿者不給(冠婚所須)」、解任還京人力亦公給云(二一)などの章句や(譯文省略)、山東諸州(二②) provinces de l'Est des montagnes (de l'ancien Etat des Ts'i) 貌閱(三②) examiner les feux et les personnes enregistrés (〔役〕十二番(三③) douze tour 以下の語句にそれが見出される。唯これらの中にあつても枝葉の問題として看過できない一事は課役に對する解釋なのである。「都下人…皆無課役」…aucun d'eux ne payait d'impôts, ni ne devait des corvées (二一)・「諸州無課調處及課州管戶數少者」 dans toutes les localités des préfectures qui ne paient pas les contributions obligatoires, ainsi que dans les préfectures qui paient les redevances, mais où le nombre des feux administrés est peu élevé (三④)に見られるように課役(課調)は時に impôt et corvée とみなされる反面 contribution obligatoire また redevance (三⑤「除婦人及奴婢部曲之課」の場合も同じ)とも解せられてゐる。今これを序論における著者の用語例、徭役=corvée、軍役=service militaire、賦税=impôt と参照するならば、課役に對する解釋は更にその混亂をますますものといわれねばなるまい。もつとも課役の問題は、

最近の吾國の學界においても、法制用語としての譯「徭役説を曾我部博士が發言されるまでは、必ずしも一定した意味内容に限定されてはいなかつた。従つて専らこの問題を論ずるにしても、それは優に特殊研究を形づくるでもあろうものだけに、強いてこゝに譯文の統一を求めるのは望蜀の類に屬するかもしれないが、とにかく問題の所在を明かにする必要だけはあるであらう。

以上を要するに、全くの概觀的な紹介に終ることゝなつたが、それというのも本書には既に楊聯陞氏に詳しい書評があり (*Journal of the American Oriental Society*)、また石田幹之助教授の紹介も出たことであるので(東方學)、それらとの重複を避けようと努めた結果に外ならない。併せて兩氏の文を参照されたい。

なお最後に一言したいことは、從來やゝともすればその研究の興味を中國周邊地域にむけがちであつた歐米の東洋學が、漢籍の古典を操作するという技術的困難をのりこえて、中國史自體を對象とする研究分野に進出しはじめた事實である。シャヴァンヌのフランス

譯「史記」はしばらく措くとして、楊聯陞氏の英譯「晉書食貨志」(*Harvard Journal of Asiatic Society*, vol. IX, 1946)「ナンシー・リー・スワンによる英譯「漢書食貨志」(*Nancy Lee Swann; Food and Money in ancient China*, 1950)「ハリーシェ教授のフランス譯「隋書食貨志」」それに最近のシエルマンによる英譯「元史食貨志」(*Herbert Franz Schurmann; Economic structure of the Yuan dynasty*, translation of Ch. 93 & 94 of the *Yuan Shih*, 1956)と列挙しうる業績は、まことに偉觀と稱しても差支えはなからう。ウィットファール博士にその好著「*History of Chinese Society*. Leao」の姉妹篇たる「秦漢社會史」の出版が準備されつつあるのも、かゝる新しい氣運の一角を示すものであつて、吾々の等しく期待するところに他ならない。バラーシェ教授の勞作に接するに當つて、歐米東洋學のこの傾向を顧慮することは、本書の持つ意義をより一層正しく理解する上に、決して無駄ではないであらう。

(三三・七・二九 愛宕松男)